

# 悠久の京を訪ねて Part V Vol.5



KYOTO  
ARCHAEOLOGY CENTER

京は古より人々が集い、その気候・風土の中、人々の生活が営まれてきました。

京都府内の遺跡で多数発掘された出土品により、縄文・弥生時代までさかのぼり、当時の様子を知ることができます。

私たちが住んでいる地域にはどのような歴史があったのか、出土した資料を基に過去の文化やその発祥の歴史を訪ねましょう。

PartVでは、5回シリーズで8月に開催した第29回『小さな展覧会』より主な遺跡や遺物について紹介します。

## 中世京都の土師器皿



大川遺跡

### ■宴会好きの日本人

平安時代末頃から安土・桃山時代の遺跡を発掘調査すると、数多くの土師器皿が一カ所から集中して出土することがあります。割れていないものも多く、一度食器として使用ただけで捨てたようです。当時の人々は現在の紙皿や紙コップのように食事のたびに皿を使い捨てにしたのでしょうか。

戦国時代の文明3(1471)年に朝鮮王朝の宰相申叔舟によって書かれた『海東諸国記』には、「(日本)人は貧富と関係なく宴会を好み、(中略)飲食には漆器を用い、尊処には土器を用いる。ひとたび用いればすぐ捨てる」とありま



14世紀の宴会の様子(『繪師草子』国立国会図書館デジタルコレクションより)

す。当時の日本人は宴会好きで、宴会にはかわらけ(土師器皿)を使い、一度限りで捨てたというのです。

### ■京都ブランドの皿

舞鶴市大川遺跡では、鎌倉時代の数ある土坑のうちの1つから土師器皿がまとまって出土しました。いずれも灯明皿ではなく、飲食に使われたようでした。出土した土師器皿の約40枚のうち、3枚だけが地元で生産されたもので、残りは全て京都周辺(畿内)の皿を模倣したとみられる製品でした。京都風の皿を好んで用いた事例といえるでしょう。同様の事例は福知山市大内城跡(平安時代末)や遠くは岩手県柳之御所跡(平安時代末)など日本各地の有力者の城館などでもみられます。

当時は京都風の皿を用いた宴会を行うことが、人々のステータスであったのかも知れません。



土師器がまとまって出土したようす(大川遺跡)